7　視覚障害者および高齢者疑似体験学習の教育効果

渡邉美幸，平澤明美
明倫短期大学　歯科衛生士学科

keywords：視覚障害者，高齢者，疑似体験学習

はじめに

高齢者の人口増加にともない，心身に障害を有する高齢者等との対応が多くの場面で歯科衛生士にも求められるようになってきた．そのなかで障害者や高齢者特有の身体的および精神的な面の配慮は必須であり，それを理解することは重要と思われる．そこで，本学では，選択必修科目である介護技術論の実習の一環として，実体験から障害者や高齢者への理解を深めることを第一の目的に視覚障害者および高齢者疑似体験学習を行った．その教育効果について検討したので報告する．

対象および方法

対象は，介護技術論を選択し，本体験学習に参加した本学歯科衛生士学科２年生94人で，実施日は，平成20年９月９日ある．体験学習の方法は，２人１組とし，視覚障害者および高齢者疑似体験者役，介助者役を交代で行うことにより，身体的および精神的な面からの考察を得られるよう考慮した．体験学習前後に自由回答式でのアンケートを行い，その結果を比較･検討した．

結果および考察

どんなことに注意して歩行介助をしたほうが良いと思うかとの質問に対し，視覚障害者については体験学習前，「安全への配慮」と回答したものが63人と最も多く，次に「周囲の状況説明」が58人であった．体験学習後は「周囲の状況説明」が最も多く86人，次いで「声かけ」が61人であり，実体験から見えないことの不便さや視覚障害者の不安な気持ちを理解し，具体的な介助方法を学習したことが伺える．高齢者については体験学習前後ともに「相手のペースに合わせる」と回答した者が最も多く，次いで「安全への配慮」であった（図１）．また，本体験学習後，視覚障害者を理解できたかとの質問に対し，「大変よく理解できた」と回答した者が83％，高齢者についても67％であった．これは，視覚障害者や高齢者の気持ちを理解することができたと同時に具体的な介助方法や関わり方を自ら考え，実践できるものと思われる．

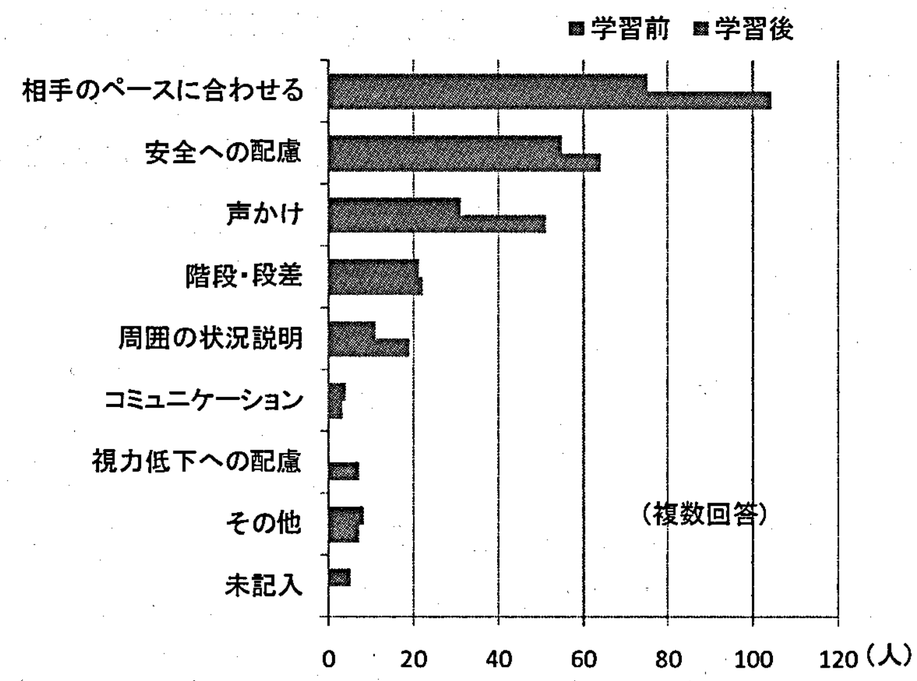

図１　高齢者の歩行介助時に配慮する事項

まとめ

今回の調査結果から，本体験学習は，視覚障害者および高齢者の身体的機能や心理状態を理解することができ，自らその関わり方や介助方法を考えるきっかけとなることがわかった．また，介助するうえで重要な信頼関係やコミュニケーション能力の必要性についても理解を深めることができたことから，本体験学習は有効なものだったと思われる．今後は体験学習での教育効果を継続し，より充実したものにしていきたい．